

## 新田を拓く—江戸時代、伊浜村の天神原新田開発—

島田市博物館

岡村龍男

### はじめに

- 延享3年(1745)、伊浜村は天神原・波山の新田開発(新しい田の開墾)を命じられた  
←伊浜村は、天神原・波山の新田開発は村にとって不都合であると拒んだ。  
新田開発で田が増えれば人々の生活が豊かになるように思えるが、伊浜村は何故新田開発を拒んだのか？
- 江戸時代、最初の100年=17世紀、全国各地で積極的に行われた新田開発によって日本国内の耕地面積は約1.5倍となり、収穫量も増え人口は約2倍に増加した。しかし、江戸時代の残り160年余りは大きな増加が見られない⇒大規模開発は自然に負荷がかかった

### 1. 江戸時代の伊浜村

#### ①領主(お殿様)

幕領→享保13年(1728):上野館林藩領→享保19年:幕府領→元文5年(1740):館林藩領→  
**延享3年(1746):掛川藩領**→宝暦9年(1759):幕領・掛川藩領→?:掛川藩領

#### ②人口

貞享5年(1688):家数85 人数466人 『掛川誌稿』(19世紀初):家数120 人数653

#### ③石高の変遷

慶長3年:127石 寛永16年:147石 『掛川誌稿』(19世紀初):236石 明治初年:160石  
←明治期に減った理由は不明

### 2. 天神原新田開発をめぐる古文書

#### ○肥田家文書 9-13-32

年号が書かれていないが、関連する内容の古文書と照らし合わせ、延享3年(1745)のものであると推定  
【内容】伊浜村の村役人が三島代官所の役人に対して提出した9点の古文書をまとめた写し  
新田開発を命じた三島代官所に対して、伊浜村は新田開発が不都合であると主張している

9点の写しから、伊浜村の主張をみていくと

- ・天神原は、居村付の地所のため多くを林に仕立て村人がそれぞれ所持している伊浜村山稼第一の場所である。取り上げられては村人が生活に難儀する。天神原は伊浜の居村に添える形の林で古田畑もあり、地所の新田開発はお許しいただきたい
- ・波山には立木が少しあるが、それ以外は萱野であり、伊浜村の屋萱・秣・刈敷などを刈る場所で、先年も他村から盗み刈りがあり出入りに及んだ場所である。立木は天神原同様に百姓の持林なので、新田開発のために取り上げられては困る →天神原・波山は伊浜村の生活を支える資源

- ・天神原・波山を林などに仕立てた場合、猪・鹿が多く住み着き本村の畑に猪・鹿が増えて困る  
→江戸時代に獣害は深刻な問題であった
  - ・天神原には、田んぼになる場所が一切ない
  - ・波山に泉橋という湧き水が少し出る場所があるが、この水を古田の用水として引いているため、この水を使って新田開発をしてしまうと古田に用水がなくなってしまう。天神原に手洗いの水があり、これを引いて田んぼが出来ないかとおたずねがあったが、この水は窪地にあるため用水にはなりにくい。特に夏は喝水してしまうので田んぼへ引くことはできない→限りある水資源が新田開発によって失われてしまう
  - ・天神原の古新田は寛文4年に願い出て開発したが土地が悪く作物が育たない  
→すでに新田開発を行ったが成果が出なかった
  - ・天神原・波山は御林にした場合、これらの場所は海辺の山の上で潮風が強く、木は成長しない。また、木は芝木・雑木くらいしか育たない  
→御林に適さない土地で、しかも木を津出しするためには2里(約8km)離れた子浦湊へ持って行くしかないが、道がとても狭い難所
- ⇒伊浜村は最後まで新田開発は不都合であると主張し続けたが、三島代官所からの新田開発命令が覆ることはなかった

※翌、延享4年(1746)10月、伊浜村は三島代官所の命令を聞き入れ新田開発がスタートする

## おわりに

### ■新田開発＝豊かな暮らしではなかった

→それまで、限りある資源を利用して生活してきた伊浜村の人々にとっては、資源の再分配が困難になる命令だった。

### ■今後明らかにしていくべき課題

- ・天神原の新田開発は、その後の伊浜村の生活にどのような影響を与えたか  
→明治初年、天神原の石高は36石余。江戸時代後半の伊浜村の人々は、天神原の新田をどのように利用していたのか
- ・伊浜村の生業の全体像はどのようなものであったのか  
→漁業はあったのか、米と畑からとれる作物の割合、材木など山からとれるものはどの程度だったのか  
⇒今後の古文書調査の進展にご期待下さい。